

実践的コミュニケーション能力の基礎を養う小中一貫した 英語教育の在り方を求めてⅡ

－「自己表現活動」を生かした中学校第2学年英語科の実践と指導計画の検討を通して－
村山 紀子

平成17年度から京都市では、市内全ての小学校で、総合的な学習の時間を使い、英語活動が取り組まれるようになった。中学校では、小学校英語活動を経験してきた生徒たちが身につけてきたことを生かし、小中一貫を見据えた指導が必要であると考えた。昨年度は、第1学年で指導計画を検討し、研究協力校において、実践授業を行った。今年度は、第2学年の指導計画を検討し、実践授業を行った。生徒が英語での自己表現活動を通してクラスの友達と、心と心をつなぐことができればと願っている。実践的コミュニケーション能力の基礎を培う自己表現活動の実践事例を、実践授業を通して提示する。

第1章 本市の小学校英語活動と 中学校英語学習

第1節 本市の小学校英語活動

本市の英語活動は、平成14年に出された京都市版「小学校英語活動指導計画と活動事例集(試案)」をもとに、各校の実態に合わせてカリキュラムが組まれている。その中で子どもたちは、「自分の思いを伝えたい」という気持ちで英語を使っている。

英語活動を経験してきた生徒は、英語活動を経験していなかった生徒と比べてどのような傾向が見られるのかを、本市の1年生を担当している教員にアンケートを通して聞いてみた。その結果、「英語の挨拶がスムーズにできる」「英単語を知っている」「英語を口に出すことに抵抗がない」など、コミュニケーションに対する態度がある程度育っているという回答が得られた。また、「文字を書いたり、覚えたりすることへの抵抗が大きい」という回答もあり、指導上留意すべき点もあることがわかった。これらの成果や課題を知り、英語学習につなげていく必要がある。

第2節 本市の中学校英語学習

生徒は英語学習において、「英語で話したい」「英語で書きたい」と願っている。その願いに応えるために、授業の中ではまとまった英文を書いたり、話したりすることを指導する。トピックを与えて書かせるときには、生徒のつまずきに配慮し、スピーチの型や豊富な例を生徒に提示する。また、生徒が書いたものを添削する段階では、個別に生徒のつまずきを知り、指導につなげたい。

さらに、文章を書くときの表現方法については改良したマッピングを活用する。このことにより、生徒が自分の伝えたいことを構造的に考え、表現ができるようになりたい。

第2章 自己表現活動を生かした 第2学年の指導計画の検討

第1節 指導計画の検討

第2学年の指導計画は、図1に示す3つの視点から検討する。自己表現活動の中で、視点①、視点②を意識して取り込むため、とりわけ視点③に焦点を当てて指導計画を検討する。

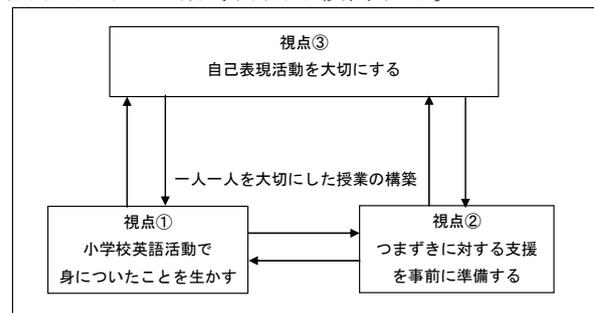


図1 実践的コミュニケーション能力の基礎の育成で大切にしたい3つの視点

第2節 自己表現活動でめざすもの

日々の授業での自己表現活動を土台にして、年間3回のスピーチに取り組む。また、スピーチ後にその内容についてクラスの友達と英語で対話したい。図2は、スピーチを支える3つの取組とスピーチで目指す生徒の姿である。

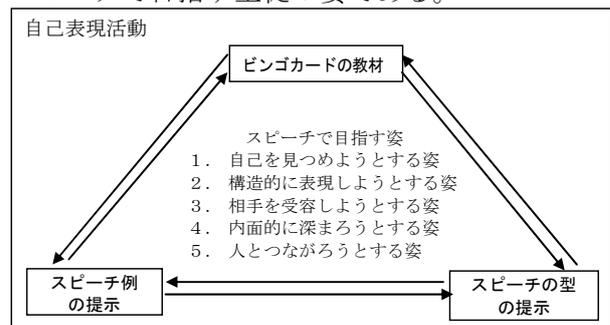


図2 スピーチを支える3つの取組とスピーチを通して目指す生徒の姿

第3章 心と心をつなぐ自己表現活動の 実践事例

第1節 スピーチにおける指導

第1回スピーチを Review Lesson で、第2回スピーチを Unit 1 Project で、第3回スピーチを Unit 2 Project で指導計画に位置づけた。

第1回スピーチでは、5月に「自己紹介」をテーマにスピーチを行った。スピーチの後には、英語と日本語で、スピーチを聞いてわかったことや、思ったことを述べ、その感想に対して、発表者からコメントを言った。感想の話型を生徒に提示することで、その話型を意識しながらも、自分の思うことを述べるようにした。また、相手を受け入れながら「聴く」ことも指導した。(写真1)



写真1 スピーチを聴く

第2回スピーチでは、「夏休みにがんばること」をテーマに20文程度のスピーチを行った。生徒の思考の流れに沿って考えられる改良したマッピングを活用し、より構造的に、自分の伝えたいことを表現できるようにした。また、このことで、聞き手にも、わかりやすいスピーチとなった。英語で行ったスピーチ後の感想や、それに対するコメントは、いくつかの表現をビンゴカードで、あらかじめ言い慣れておくことで、使えるようにした。

第3回スピーチは、「私の夏休みと私の夢」をテーマに20文から30文のスピーチを行った。マッピング例やスピーチ例を参考にしながらも、自分の伝えたいことを構造的に英語で表現することを指導した。

第2節 自己表現活動における生徒の姿

第1回スピーチでは、生徒は日本語で、自由に感想や、思ったことを述べることができた。そのことで、クラスの友達の個性を理解したり、クラスの友達の言葉で自分を見つめなおすきっかけとなったりした。(写真2)

第2回スピーチでは、英語で感想を述べた。ビンゴカードで練習した英文を使い、表現することができた。生徒からは、「英語で感想を言えた。」「英語で感想に対してコメントが言えた。」といった感想があり、達成感を得られた様子であった。

第3回スピーチでは、マッピングを活用し、構造的な英文が書けるようになってきた。相手の話に耳を傾けて聴くことも定着してきた。

第4章 小中一貫した英語教育を求めて

第1節 小学校英語活動と中学校英語学習を つなぐもの

小学校英語活動を経験してきた生徒は、コミュニケーションに対する態度が育っていると考える。この成果を中学校の英語学習に生かし、さらに伸ばしていくために意識しておかなければならないことを2つ述べる。

1つ目は、生徒の「つまずき」である。中学校英語学習では、英語を「読む」「書く」の学習が加わり、さらに「正確さ」が求められる。英語活動で求められたものとの違いに、生徒が戸惑うことが予想される。生徒が意欲を低下させることがないように、生徒の戸惑いやつまずきを予想して、手立てを事前に準備しておき、授業を進めたいと考える。

2つ目は、授業の中で、自己表現活動を積極的に取り入れることである。自己表現の内容は、生徒の興味・関心のあるものであり、生徒の発達段階に合ったものでありたい。そのためには、話型を取り入れたり、生徒に表現して欲しいと思う例を豊富に提示したりすることが大切であると考えられる。まとまった英文を書くときには、筋道を立てた構成で書けるようになって欲しいと思う。文の構成を考えて書くことが、生徒の英語での言語能力を高め、さらに、母語における言語能力をも高めると期待している。



写真2 スピーチの感想を述べる

第2節 中学校英語教育で大切にしたいこと

スピーチの後の感想やコメントを言うことに取り組んだ中で、生徒が「自分の話すことを聴いてほしいし、どう思っているのか言って欲しい」と思っていることが強く感じられた。そして、自分の英語のスピーチに対しての感想や質問を受けたときには、自分の話す英語を通して、自分自身を理解してもらえたと、とても嬉しく感じ、またそのことに対して、英語でコメントが言えたときには、達成感や充実感をもつことがわかった。

生徒がクラスの友達と幅広く人間関係を結ぶような英語でのコミュニケーションができることを願っている。人と人が出会い、心と心をつなぐことのできるようなコミュニケーションを、英語の授業で目指したいと思っている。